The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉『軒もる月』論 : 凝視の先にあるもの
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	阪大近代文学研究. 2009, 7, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92657
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

樋口一葉『軒もる月』論
――凝視の先にあるもの――

水野　亜紀子

一

樋口一葉『軒もる月』は、明治二十八年四月三日・五日に「毎日新聞」紙上に発表された短編小説である。親の定めた結婚を受け入れて職工に嫁いだ、お袖が主人公である。親の決定に逆らうことができず承諾した結婚は、お袖を苦しく、かつ不本意な状況に追い込んでいる。

『軒もる月』では、お袖が不本意を克服しようとする、まさにそのときの様子がクローズアップされる。本作の表現手法の特性は、お袖がある決断をし、それを実行に移すまでの短い時間だけが切り出されているところにあるといえよう。そうした手法が取られることに着目しながら、本論では一編の読解を試みる。

なお、本文を検討するにあたり次の点に留意したい。末尾近く、お袖が高笑いをする場面における「殿、我良人、我子、これや何者」という箇所は、「殿のみならず、良人、我子に対する執着までも止揚した女の最後の心境は唐突で理解困難」(1)と笹渕友一氏に指摘されるように、そこだけが浮いた印象を与えている。お袖の高笑いを「女の心の揺らぎとその克服という一義的な読みの方向を攪乱させ、軋みをもたらすもの」として捉える関礼子氏は、「袖の課題が桜町に対する「我執着」の切断だけであったとしたら、「殿、我良人、我子、これや何者」という三者を揃ってつき放すようなことばはなんとも不自然である。あきらかにこのことばと、「やよ殿」以下、手紙を「寸断」し、炭火の中へ「打込みつ」づけ、「空に棚引」く「煙」が消えてなくなる様子をみやる物語の終局部との間には文脈の屈折がみられる」と述べる(2)。では、お袖に高笑いをさせる心の働きは何か。また、殿・夫・子に対して高笑いをすることは、どのように捉えればよいか。本論は、考察をそれらの問題に収斂させる形で進めることになる。

二

「我が良人は今宵も帰りのおそくおはしますよ」に始まる冒頭のお袖の内言は、帰りの遅い夫を思い遣る内容となっている。帰りの遅い夫といえば、『われから』の恭助のように、外での付き合いや遊びを優先させて家を空ける夫という設定もあろう。しかし、お袖の夫はそうではなく、「今宵」より家族のために労働時間を延ばして働くのだという。

それにもかかわらず、お袖は直ちに意識を「桜町の殿」へと移し、夫を裏切る悪女的な面を見せる。有夫でありながら、お袖は殿へ恋情を抱いているのである。

橋口晋作氏は既婚者の恋を扱った『軒もる月』を、「配偶者、許婚者に縛られた男女を登場させて、愛の三角関係の中で人間の心理を追求していく作品群」としての『ゆく雲』『うつせみ』『にごりえ』『裏紫』の中に位置付ける(3)。また、滝藤満義氏はこの作品のテーマが恋における「解脱」であるとして『ゆく雲』『うつせみ』との関連を見る(4)。橋本威氏はこの作品が『ゆく雲』とともに「恋情からの脱却をテーマとする」と述べる(5)。

諸家が着目するように、『軒もる月』は一編を通してお袖が恋情から脱却する過程を描く。お袖の恋情が作中でいかに表現されるかということとあわせて、まずはその様相を確認しよう。

お袖の恋情の描かれ方は、月の光との関わりで表現されるところに特徴がある。月は「大路の霜に月氷りて」「更けたる月に霜さむし」と、霜とともに冬の厳しい寒さをあらわす一方で、お袖の内面を炙り出すものとしても機能している。次の引用は、働く夫を心配するお袖の内言の直後に当たる箇所である。

女は破れ窓の障子を開らきて外面を見わたせば、向ひの軒ばに月のぼりて、此処にさし入る影はいと白く、霜や添ひ来し身内もふるへて、寒気は肌に針さすやうなるを、しばし何事も打わすれたる如く眺め入て、ほと長くつく息月かげに煙をゑがきぬ。

「破れ窓の障子」を開いて外に目を向けることで、夫への気遣いは中断される。「ほと長くつく息」はそれだけでお袖が何かしらの思いを抱くことを暗示するが、それが「煙」と表現されるところに注目したい。これは寒さのために溜息が「煙」のように見えることをあらわすが、そこには和歌的な表現もまた持ち込まれていると考えられる。例えば『源氏物語』須磨には「浦にたくあまだにつつむ恋なればくゆる煙よ行く方ぞなき」とある。胸の内に秘められた恋の火は見えないものであるが、ときにそれは「煙」となって外にあらわれるのである。お袖の眺める月は、その「煙」を照らすものとなっている。

また別の箇所を見よう。先の引用の後より、お袖は殿へ思

いを馳せる。それを自ら中断させるところには「女子は太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば」とある。「月もる窓」を閉じることで夢想が意識的に止められているが、ここでお袖の殿への思いは、月の光に照らされる「胸の雲」と表現される。

お袖が殿への恋情を退けることができるのは、殿からの手紙を読んだ後のことであった。末尾は「月やもりくる軒ばに風のおと清し」と締め括られる。お袖の胸に、もはや「煙」として暗示される思いはなく、殿への恋情が断ち切られたことがそこに表現されている。

先行研究において月の意味は様々に論じられ、和歌を参照しての指摘もなされている(6)。それを認めたうえで、月の光は和歌的な発想を下敷きとして、表には出さないが胸の奥で恋い慕う下燃えの恋の煙を照らし出すものとして働いていることを指摘したい(7)。

ちなみに、月の用いられ方は、定稿に至る過程で象徴化の方向に向かっている。筑摩書房版『樋口一葉全集』に整理されている未定稿資料を参照すると、AからDまである未定稿のうち、BⅡ3の抹消箇所の「軒ばはかたぶきて月のもるにまかせ、床板は踏むに音して畳の塵のはけどもうせず」や、BⅡ4（先のBⅡ3を改訂した断片）の「軒端はあれてさしいる月のかげ寒きに」では月は情景描写にとどまるが、C2（後に触れるDIに先行する断片）においては「軒もる月のかげ寒けきにきたる衣はうすけれども、さし入る光に今昔のわかちあらんや、昔しは女塾のまどに友と眺めて」とあり、ここでは月は情景描写でありながら、過去を誘引する働きを持つものとなっている。

さらに、定稿に近い内容のDI1には次のようにある。「女は破れまどの障子を開らきて外面を見渡せば、向ひの軒ばに月のぼりて、こゝにさしいるかげいと白く、霜やそひくる身内もふるへて、寒気は肌に針さすやうなるを、しばし何事も打わすれたるやうにながめ入りて、ほと長くつく息月かげに烟をゑがきぬ」。その後には「我が月の前に棚引は何物ぞや、我れは猶寐ぶらで夢を見るにやあらん」「夢か、現か、否な我がまん心の我れを誘ひて、きたなき欲の世界を見するにやあらん」などの言葉が見られる。ここから、DI1では、月が誘引する夢想の内容は異なるものの、月が果たす役割が定稿とごく近いものとなっていることがわかる。すなわち、月の光は過去を誘引するだけではなく、女の内面を炙り出すものとなっているのである。未定稿AIにおいて既に題名が「軒もる月」とされていることから、月のモチーフを用いることが早くから想定されていたことがうかがえるが(8)、月のモチーフは創作過程において、より象徴性を与えられたものとなっていったのである。

以上見てきたように『軒もる月』は一編を通して、お袖が恋情を捨て去るまでの過程を描く。それゆえ先行研究で論じ

られるように、それ自体をこの作品の中心的なテーマとして見ることもできよう。ただ、結果的に恋情からの脱却をもたらしている〈手紙の開封〉という行為を支えているのは、結婚生活を続けていこうとするお袖の意志である。結婚生活の継続を志向するお袖の姿勢が作中に強く打ち出されていることは見過ごすことができず、論者はむしろそこに主題を読み取る。この点について以下に詳しく見ていくことにしたい。

論者が着目するのは、『軒もる月』を論じるうえで曖昧に解釈されるきらいがある「心」の語である。本作で多用される「心」という語には一般的な意味もあるが、そこにはさらに特別な意味が与えられていると考えられる。

お袖が隠しておいた未開封の手紙を取り出すところまでには「何所やら我が心の顔に出でゝ卑しむ色の見えけるにや」「恐ろしや此大恩の良人に然る心を持ちて仮にも其色の顕はれもせば」「勿体なき罪は我が心よりなれど」「殿だになくは我が心は静なるべきか」「母が心の何方に走れりとも知らで」などの記述がある。「心」の内実は詳しく説明されないが、本作では「心」という語が使われる際に、お袖が妻または母としてあろうとするも、その心が乱されて保てない様が表現される。作中では一貫して妻・母としての規範から逸脱する心が、「心」の語を用いてあらわされているのである。「心」は「胸」の語を用いて表現される恋情そのものと厳密に区別して捉えるべきである。「胸」の語が感情に関わる表現であるのに対して、「心」の表現するものには知性による判断が伴う。

そもそも、お袖の結婚は親の定めたものであった。お袖が嫁ぎ先を知ったときのことは次のように回想されている。

言はゞ我が良人をはづかしむるやうなれど、そもそも御暇を賜はりて家に帰りし時、聟と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿体なき比らべなれど我れは殿の御地位を思ひ合せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。

「天女が羽衣を失ひたる心地」と振り返られるように、現在の結婚生活はお袖にとって落胆から始まったものであった。それでも、嫁いだ後のお袖は妻または母として、自分の置かれた位置に甘んじて暮らしていこうとし、表面上のことであるとしても、それは今日まで果たされている。しかし、お袖はその結婚生活の中で、妻として母として生きていこうとする意志が、ともすると殿への恋情によって揺さぶられることを思い悩んでいる。

「心」の「腐り」という表現を俟つまでもなく、「心」という語が用いられるとき、そこには否定的なニュアンスが含まれる。お袖が自身の心を好ましくない状態にあると捉えていることが、そこに示されるのである。

「心」という語に着目することで浮かび上がるのは、お袖の結婚生活を貫こうとする姿勢である。お袖の葛藤の前提に

は、そのような姿勢があることを指摘できよう。

三

お袖には結婚前より、殿への恋情や、殿との関係によって得られるであろう生活への憧れがあった。それが結婚後も続くことは、「桜町の殿といふ面かげなくば胸の鏡に映るものもあらじ」や「果敢なき楼閣を空中に描く時」の箇所に明らかである。さらに現在では、夫や結婚生活に対する満たされない思いも抱いている。それは弦巻克二氏の述べるところの「結婚という制度の機関（からくり）」によって生じた不満であるといえる[9]。本節では、結婚後から今日に至るまでのお袖の在り方を確認し、「今宵」行われることになった「心試し」の位置付けについて考えたい。

お袖は満たされない思いを抱いた状態にあっても、倫理的な意識を働かせることで結婚生活を維持してきた。殿に対して思いを馳せると同時に、妾になることが「邪道」であり、厭うべき選択であると考え、そのことを通して殿への思いを抑えようとしている。

また、夫に対しては、恩を感じていることを強調する。夫が家族のために真面目に働いていることや、かつて自分の両親の世話をしてくれたことを振り返り、彼を「大恩の良人」「生涯大事にかけねばなるまじき人」とする。そのことから彼を「不足」に感じてはならないと考える。

子に対しては「あはれ可愛しいかなる夢をか見つる乳まいらせんと懐あくれば笑みてさぐるも憎くからず」「頬は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる腮の二重なるなど」と、可愛さを感じていることが示される。子に可愛さを感じることは、「勿体なや此の子といふ可愛きもあり」「斯かる人さへある身にて」とあるように、我が身に思いをめぐらせる契機ともなっている。お袖は子の可愛さから、子を持つ母としての立場を意識し、それに相応しいと考えられる身の振る舞いを選び取ろうとしている。

お袖は、殿へは恋情、夫へは恩、子へは可愛さを感じる。いささか図式的ではあるが、そのことは彼女の三者それぞれとの関わり方を規定している。お袖は三者との関係の中で自分を位置付けるのである。戸松泉氏の述べるように、お袖は「関係のなかで生きてきた自分」を認識し、それを「宿命」として受け止めてきた[10]。そのようにして、お袖は与えられた形で始まった結婚を全うしようとしている。

もっとも、その決意を揺さぶる殿への思いは、後ろめたいものとして常にお袖自身に自覚されている。お袖の自覚は、例えば次のような彼女の振る舞いから看取できよう。殿から寵愛を受けるお袖は、「御覧ぜよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを」とあるように、殿の妻

の表情に自分に対する憎しみを読み取る。そして、顔色を読むことで殿の妻の心情を忖度するお袖は、自分の夫に対しては逆に、自分の顔色が読まれるのではないかと懸念する。「何所やら我が心の顔に出でゝ卑しむ色の見えけるにや」と、殿との比較から夫を卑しむような気持を抱くのが顔色に出ていないかと危ぶむのである。また、自分の無意識な「素振」についても、夫がそこから殿との関係に起因する何かを読み取るのではないかと考える。

夫れのみにても我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振の有りしか、我れは知らねど左もあらば何とせん、果敢なき楼閣を空中に描く時、うるさしや我が名の呼声、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、

お袖が人の顔色をうかがったり、または自分の顔色が読まれるのではないかと考えたりするのは、彼女が後ろめたく感じながらも殿への思いを断ち切れないことと関わる。お袖は殿への思いを押し込めつつも、それをきれいに断ち切ることができないことを自覚しているのである。

お袖はかかる状態にあることをよしとせず、ついに殿からの手紙を開く[11]。「心試し」とは、結婚生活の継続を志向する中で抱えた迷いを、誤魔化さずに見る行為である。それは己の「心」をありありと見ることを意味する。これまでのように「心」を秘める、あるいは曖昧なままに見るのではなく、はっきりと見るのである。

「今宵」行われることになった「心」の凝視は、不本意な形で始まった結婚に向き合うためのステップとなる。「今宵」の特殊性はつとに論じられているが[12]、本作では結婚をしてから随分後になってようやくなされることになった、不本意な境遇を受け入れようとするお袖の覚悟がクローズアップされているのだといえる。

四

『軒もる月』は、嫁ぐ本人にとって不本意な形で始まった結婚の、その後を題材とした作品である。『軒もる月』のように、思いのままにならなかった結婚のその後を題材として扱う同時代の作品には、登場人物の科白によって、または結末によって、嫁ぐ当人にとって不本意な形でなされる結婚の在り方を非難するものが少なくない。

例えば、みさを『断腸』（明治二十三年十二月『女学雑誌』第二四二号～第二四五号）である。『断腸』は、現在の結婚生活を「身の不遇」とする「妾（わらは）」がそれまでの成り行きを振り返る一人称小説である。「妾」の両親は「官位貴く、財宝多かるをのみ選びて」我が子を結婚させようとする。「妾」には結婚に対する理想があり、恋人もあったが、無理に結婚させられてしまう。結婚した相手は彼の父の死後、家庭を顧

みなくなっていく。師からは「若良人にして不徳不道の人たらんにはそを導き諭してよき道にかへすは女子一世の大事業なり、異国にはかゝる功績を建つる女子多かるを聞く、御身かくなしね」というアドバイスを受けていたが、「妾」は為す術もなく辛い思いを抱えたままでいるという。

『断腸』では、夫の酷い仕打ちや、夫とうまくいかないことへの苦しみが述べられる。現在も続く苦しみが綿々と綴られることによって、親の定めた結婚のその後がいかに不幸であるかが訴えられている。さらに、この作品では「妾」が確固たる結婚観を持つ人物として設定されていることが注目される。その結婚観とは「妾徒らに異国の風俗をのみ学んとにはなけれども」と断りを入れながらも学校で学んだ西洋の「習慣」に賛同したもので、「真の愛」の大事を主張するものである。「妾」は両親のすすめではなく、自分の価値観に則って結婚相手を決めることを願っている。それが挫折という結果に終わり、理想を貫けないところに「妾」の不幸がある。

他には、清水紫琴『こわれ指環』（明治二十四年一月『女学雑誌』第二四六号付録）がある。これもまた、語り手が自分の境遇を語るものである。「私」は親の意見に抗うことができず嫁入りすることになるが、嫁いだ後もなかなか夫に馴染むことができない。あるとき、夫が別の女性の存在を隠しながら今もなお関係を続けていることを知る。その後、本や雑誌で「泰西の女権論」に接する「私」は「女子の為に慷慨する身」となる。その中で「夫の行を矯め直して、人の夫として恥かしからぬ丈夫にならせたいといふ、一歩進んだ考」を持つようになるが、力及ばず、ついに別れることになる。「私」は後進が自分と同じ過ちを犯さないよう力を尽くそうという望みを起こす。

『こわれ指環』では、「私」の結婚が親に決められること、その結婚が結局は破綻を迎えることが述べられる。「私」がそのときの辛さを語るところに、親から強いられるような結婚の在り方への批判を読み取ることができよう。ただ、『こわれ指環』の真骨頂は、満たされない結婚生活の中で「私」が女権に目覚めたことが語られるところにある。作中には、娘時代の「私」が女学校での教育や母親からの感化を受けて「婦人の運命は憐れ果敢ないもの」と考えていたことが示されている。「私」はそこから脱して「泰西の女権論」を説く身となっている。

田沢稲舟『唯我独尊』（明治三十年一月『文芸倶楽部』第三巻第二編）には、「紫子」が養父への義理のために仕方なく結婚をした後の出来事が描かれている。作中で詳しく説明されないが、この結婚もまた本人の思い通りにならない結婚である。梗概は以下の通りである。「紫子」の「心にもあらぬ嫁入」の相手は「好色者の噂」の高い男である。彼女は結婚後もその男と打ち解けない。あるとき、「紫子」はかつて思いを寄せていた柳田という医師からもらった襟止めを呑み

込んでしまう。拒んでいた手術を結局は柳田に担当してもらうことになるが、麻酔によって口走るうわごとは彼への思いだった。それがきっかけとなって「紫子」は夫と別れ、柳田と一緒になる。

『唯我独尊』では、望まない結婚が終わりを迎える。しかも、夫と別れた後には心の中に温めていた恋を成就させ、「紫子」は幸せをつかんでいる。

親もしくは親代わりの人が定めた結婚を受け入れた女性のその後を題材とする作品には、その結婚の在り方を批判するものがある。先の三作品では、夫の態度の酷さが強調されているところや、その夫に馴染むことのできない結婚生活が終わりを迎えるところに、書き手の批判が顕著にあらわれている。さらにいえば、『断腸』『こわれ指環』の場合、語り手の「妾」や「私」の思想という名目で、女性の生き方について旧来の考えとは異なる考えが盛り込まれており、そこに書き手の主張を読み取ることができる。『断腸』では「妾」の科白や師の科白の中で「異国の習慣」として西洋から取り入れた思想を述べさせ、それを「妾」に結婚をすすめる父親と母親、嫁いだ先の夫が述べる「古来の風習」と対置させている。『こわれ指環』では「私」が「泰西の女権論」を説くようになったことを、「今日の思想の半」すら持たなかったかつての「私」を引き合いに出しながら語っている。

『軒もる月』は、ここに見てきた作品とは異なる様相を呈する。これはお袖の煩悶に多く筆が費やされるものの、結婚が親によって取り決められるそのこと自体を批判するものとしては仕立てられていない。お袖の夫が、夫として非難されるべき点を持たない人物として設定されていることは注目に値する。煩悶の原因はお袖自身が抱えるのである。お袖にとって彼女の結婚が不本意な形で始まったことは間違いない。しかし、本作では不本意な結婚それ自体を問うことに関心は向けられず、むしろ定められた境遇がどのような経過をたどって受け入れられるかということに重きが置かれるのである。

五

それでは再び『軒もる月』の本文に目を転じ、お袖の「心試し」がどのような展開を迎えるか見ていきたい。「思ふ、恋ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎」という文字が「縦横に散ら」された殿からの手紙に目を通していく行為は一時、お袖を危険な状態に引き入れる。「穢なき汚れは蒙むらじ」と考えるにもかかわらず、手紙を読み進めるにつれて「あやなき物」に欲望をかき立てられるのである。そのような状態にありながらも、次の引用のごとく、お袖は己を試していく。

いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波さわぎて沖の釣舟おもひも乱れんか、凪ぎたる空に鴎なく春

日のどかに成なん胸か、桜町が殿の容貌も今は飽くまで胸にうかべん、我が良人が所為のをさなきも強いて隠くさじ、百八煩脳おのづから消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃へばもへよとて、微笑を含みて読みもてゆく、

お袖は誰に憚ることもなく欲望の沸き立つにまかせる。「方寸」「胸」に浮かぶものをあるがままにするのである。ここで手紙を読む行為は文覚の荒行にたとえられる。「某の上人がためしにも同じく、恋人が涙の文字は幾筋の滝のほとばしりにも似て、気や失なはん心弱き女子ならば」とあるように、「心」が弱ければ気を失うほどのものであるという。

手紙を読み進めていく中で、お袖は気丈である。その証拠に、彼女は夫に対して「心」の疚しさがないこと、殿に対して「胸」が騒がないことを述べている。だが、「心試し」のゆくえとして最も注目すべきところは、次の箇所ではないだろうか。そこからは手紙を読み終えた後のお袖がどのような心境にあるかを読み取ることができる。

女は暫時恍惚として其すゝけたる天井を見上げしが、蘭燈の火かげ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてりかへすやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠えすごく、寸隙もる風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、

お袖の心境は彼女に知覚される風景に託される。傍線部のように、手紙を読み終えたお袖は「恍惚」として天井を見上げるのであるが、お袖の眺める天井は煤けて黒い。それはお袖の目に薄暗く映っている。ここは、手紙を読むことで殿への恋と向き合ったお袖が、その余韻に浸ってしばし「恍惚」とするも、殿へ恋情を抱いている自分を仄暗いものとして見たことをあらわしているのではないだろうか。

さらに、先の引用の傍線を付した後を見よう。そこには「蘭燈」が薄い光を投げて胸に照り返すのをお袖が「うら淋し」いと感じて見ていること、折柄聞こえる激しい犬の鳴き声をぞっとして聞いていること、ひどい寒さが身にしみていることが示されている。それらもまた、お袖の心境を暗示しているといえよう。お袖は殿へ恋情を抱く我が身を、うら淋しいもの、ぞっとするもの、寒々としたものとして認識したのである。

この箇所は、「心試し」直後のお袖を理解するうえで看過できない。この時点でお袖には殿へ恋情を抱くということが、おぞましく感じられているのである。

その後はどのように展開するのだろうか。本文は「来し方往く末おもひ忘れて夢路をたどるやう成しが、何物ぞ俄にその空虚なる胸にひゞきたると覚しく」と続く。この記述は、手紙を読んだ直後から高笑いをするに至るまでの過程で、お袖の心境にもう一段階、何らかの変化があることを示す。それを踏まえて、最後にお袖の高笑いについて考察したい。

六

お袖が手紙を読むことで対峙する相手は殿である。そのため、高笑いとともにある「これや何者」の対象は、殿一人であるのが自然であろう。本論の冒頭でも触れたが、殿だけではなく夫と子にも向けられる「これや何者」という言葉は、唐突であり不自然の感を免れない。にもかかわらず、三者がそこに挙げられるのはなぜだろうか。作品としては十分に表現されているとは思われないが、高笑いに至るまでの経緯を含めた本文の解釈を踏まえると、殿の他に夫・子の二人もまた高笑いの対象とされたことには次のような理解が可能であろう。

手紙を開く前の段階から、お袖が夫に対しては恩を感じ、子からは可愛さを感じることが内言で示されていた。お袖にとって二人は、妻として母としての立場を自分に意識させる存在である。その文脈を汲み取るならば、夫・子をも「これや何者」とするお袖の高笑いは、夫と子の存在を、現在の生活へと向かうための〈強制〉とする自分の認識を退けようとする行為と読むことができるのではないだろうか。お袖にとって、殿への思いを断ち切らなければ現在の生活を選び取ったことにはならないが、夫と子を現在の生活を選び取るための〈強制〉と感じているうちは、やはり前と同じで、妻として母としての位置にある現在の生活を積極的に生きていることにはならない。これまでお袖は自分の在り方を規定するものとして殿・夫・子を意識していた。顧みれば、三者は「今宵」、殿からの手紙を開く直前にも、その最中にも、お袖によってほぼ同時にその存在が思い浮かべられている。

・斯かる人さへある身にて我れは二タ心を持ちて済むべきや、夢さら二タ心は持たぬまでも我が良人を不足に思ひて済むべきや、はかなし、はかなし、桜町の名を忘れぬ限り我れは二タ心の不貞の女子なり。

・傍には可愛き児の寐姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御声ありあり聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむし、

お袖は殿からの手紙を読むことで、殿の恋を退けるだけではなく、受身的な位置にお袖を置くところの夫・子への己の意識をも断ち切るのである。結婚して以来の受身の姿勢を変えるためには、殿・夫・子の三者の存在を、自分を縛り付けるものとするその捉え方自体を退けることがお袖には必要であった。

お袖は手紙を読むことで一旦は「あやなき物」を抱くような切羽詰まった状態にまで至る。しかし結果的には、それに屈しなかった。お袖が究極的に選び取るのは、不本意な境遇を自分のものとして受け入れ、全うしようとする意志である。『軒もる月』は、お袖が境遇を引き受けることで自分の生き

方を確かなものにしようとする、その場面に焦点を当てた作品として捉えられる。

注

(1)笹渕友一『『文学界』とその時代　下』（明治書院、一九六一、一二三六頁）

(2)関礼子「「読む」ことによる覚醒――『軒もる月』の物語世界――」（『亜細亜大学教養部紀要』一九九一・十一）

(3)橋口晋作「「軒もる月」の世界――「たけくらべ」「裏紫」との関係など――」（『樋口一葉　丸山福山町時代の小説　小論』文旦屋、一九九四、四〇頁）初出は「「軒もる月」の世界――「たけくらべ」との関係を中心に――」（『解釈』一九八二・三）。

(4)滝藤満義「「ゆく雲」から「うつせみ」へ――一葉における小説の発想――」（『国語と国文学』一九九〇・十）

(5)橋本威「一葉『軒もる月』論のために――〈恋情〉からの脱却――」（『梅花女子大学開学三十周年記念論文集』一九九五・三）

(6)山田有策「『軒もる月』題名」（『全集樋口一葉2』小学館、一九七九、六二頁）、関礼子（前掲論文）、橋本威（前掲論文）、弦巻克二「一葉『軒もる月』断想――結婚の機関と「悟迷の境」の解脱――」（『叙説』一九九八・十二）、屋代博美『『軒もる月』の世界――古典受容を視座として――」（『宇大国語論究』二〇〇二・二）など。

(7)愛知峰子氏は、『にごりえ』における蚊遣のイメージについて論じる中で下燃えに言及している。（愛知峰子「『にごりえ』の情景」『名古屋大学国語国文学』一九九六・七）

(8)これについては橋本威氏の「未定稿断片ＡＩで、題名を「まどもる月」から「軒もる月」に改めているから、末尾の表現から付題したのではなく、逆に、末尾の表現は、後から題に合わせたものであろう」という指摘がある。（橋本威、前掲論文）

(9)弦巻克二、前掲論文

(10)戸松泉氏は、お袖の結婚が「宿命的自己意識に裏づけられた断念に近いもの」であることに着目する。（戸松泉『『軒もる月』の生成――小説家一葉の誕生――」『相模女子大学紀要（人文・社会系）』一九九三・三）

(11)この決断をめぐり、高田知波氏はお袖が「二タ心の不貞の女子」に対する強いオブセッションの持ち主」であることを指摘する。（高田知波「「某の上人がためしにも同じく」――『軒もる月』を読む――」『論集樋口一葉Ⅲ』おうふう、二〇〇二、一五二頁）「二タ心」については、橋本のぞみ氏が「お袖の桜町に向かう心と、夫へと向かう心それぞれの背後に、妾制度と良妻賢母規範という、ともに明治政府が近代化を進めるにつれ、しだいに確立してきたジェンダー・システムの影響が読み取れる」として、それぞれについて詳述する。（橋本のぞみ「『軒もる月』――〈二タ心〉とジェンダー・システム――」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇〇四・三）本論では、「心」を用いて表現されるものと「二タ心」とを区別して捉える。「心

試し」で対象とされるのはあくまで「心」、すなわち結婚生活を続けていこうとしながらも揺れるお袖の心であると考える。

(12)「「家の女」のコードが緩む時が訪れた」(関礼子、前掲論文)、「夫が残業をはじめた今夜、良妻賢母への締め付けがいっそう強まった」(橋本のぞみ、前掲論文)など。

【付記】一葉作品の引用は『樋口一葉全集』(筑摩書房、一九九四)に拠る。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省いた。『源氏物語』中の和歌は『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九八)に拠る。傍線は全て論者の付したものである。

(みずのあきこ／本学大学院博士後期課程)